子どもと共にいて

斎藤　美和

〈朝の子ども達〉

「せんせい、これあげる！」

「せんせい、いっぱいでおちちゃうよ！！」

朝の玄関は、いつでも賑やかです。

お母さんと手をつないで、徒歩で登園する子ども達は、季節の移り変わりを、園の行き帰りの道で肌で感じながら、その時々のお土産を手にしてやって来ます。

春のお土産は、桜の花びらやたんぽぽ、梅雨の頃は、かたつむりの赤ちゃん、秋には、きれいに色づいた葉っぱや調（つきのみや）神社のくさーい銀杏だったりします。そして何と言っても多いのは、椎の実とどんぐりです。両手に持ちきれず、ズボンのポケットをいっぱいにしてくる子もいます。

「せんせい、あのね、M子ね、英語ならってんだよ」

「わあー、すごい。おはようは、何て言ったらいいの？」

「ハローだよ」

M子は、靴を履き替えながら、他にも知っている「英語」を得意になってご披露してくれました。

R男は、お母さんの背中に隠れるようにしてやって来

ます。

「Rちゃん、見つけた！」

「ぼくはね、つかれちゃったからね、ねむたいからね、ようちえんには、いかないの」

「そうか、じゃあ、積み木でベッドでもつくろうか？それとも椅子に座って寝ようか」

そう言って、玄関で靴の履き替えを手伝って、庭の見える所まで手をつないで行くと、

「あのね、そとであそんだら、ねむいのがなおるかもしれないから」

「あらー、良かったわね。H先生がお部屋で待っていて下さるから、お話しして外に行ってね」

また、ある時は、大きい組のS君が、泣きべそで遅れてやって来ました。

「おはよう！　どうしたのかな？」

「あのね、うんとね、おかあさんにね……」

「おこられちゃったのかな？」

「うん」

「どうしておこられちゃったのかな？　寝坊でもしたのかな」

「ううん、あのね、さんすうのね、もんだいができなくってね、おこったの」

どうやら朝から家で『お勉強』をしてきた様子です。やれやれ、困ったな、勉強は学校に行ってからで十分なのに、幼稚園の子どもにとっての勉強は遊びだっていつも話しているのになーと内心思いつつ、泣きべそのS君を部屋まで連れていきました。

クラスを持たない私に、玄関で見せてくれる子ども達の顔は、部屋で担任に見せる顔とはちょっと違っているようです。朝の家でのわだかまりを、玄関での私との出会いの中で吹っ切って、部屋に行く子もいます。昨日の楽しかったことを、担任よりも先に共有できたりもします。

一方、入園当初泣いていて私がずっと抱いて過ごした子も、いつしかクラスの先生が大好きになっていきます

から、クラスを持たないでいる私は、何となく淋しい思いを持ったこともあります。

しかし、担任には見せないようなこんな朝の子ども達の顔とたくさん出会っているうちに、心のもやもやが少しずつ晴れてきました。

かつては幼稚園児だった我が子二人が中学生となった今では、「お母さん先生」と言うには少し年を食ってしまったのですが、若い「お姉さん先生」とは違った立場で子ども達と生活したいと思うのです。

〈椎の実やさんへどうぞ〉

「せんせい、きょうもしいのみやさんしたい！」

と、N子ちゃんは、玄関に入るなり私に話してきました。Aちゃん、Mちゃんも両手にいっぱいの椎の実を抱えて登園してきました。

この子達は、その前々日に遊戯室の裏で、「生のまま」の椎の実を洗いもせずに皮をむいて食べていました。

「あのね、鍋に入れてがらがらって炒って食べるともっとおいしいのよ」

「あっ、しってる、ずっとまえやまさん（年長組）がやってたよね」

そこで年長組の担任に話してから、私は子ども達と「椎の実やさん」の準備を始めました。

まず、電熱器と片手鍋を用意し、子ども達が廊下に運んできた机の上にセットし、よーく洗った椎の実を一握り程鍋の中に入れます。そして殻にちょっとひびが入るまでしゃもじでがらがらと炒るのです。やがて、その様子を見た小さい年少の池組さん達が早速机の周りに集まってきました。

まねをして拾いに行った池組さんもいましたが、せっかく拾ってきたのにそれは残念ながら「どんぐり」でした。

「さきがね、とんがっているのをひろってくるんだよ」

年長のお姉さんが一生懸命教えてあげました。

一方、「椎の実やさん」は、大忙しで炒った「椎の

実」を、五個ずつお皿に入れて、並んだお客さんに渡します。お客さんは、日の当たった廊下に座り込んで、おいしそうに「椎の実」を食べていました。

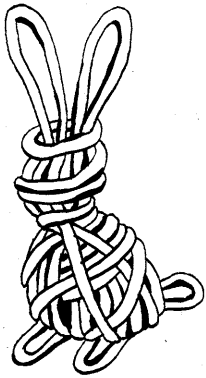
忙しかったけれど、おうちでは普段させてもらえないようなことをたっぷりとできて、よほど嬉しかったのでしょう。次の日、今日も昨日の続きをするんだと弾んだ気持ちでやって来て、朝の玄関で私に話してくれたのでした。

「せんせい、わたしもはいったんだよ」

新しいメンバーもお店の人に加わり、上手に役割を分担し合って、時々「アチッ！」と言いながら、本当に楽しそうに「椎の実」を炒っていました。

毎年のように繰り広げられる「椎の実やさん」の光景です。「椎の実」を拾っていると、落ち葉の中に珍しい虫を見つけたりします。

「じゃあね、Yくんをよんできて！　むしのことよくしっているから」



生活の中で、友達のことを理解していく子ども達です。

何でもない他愛のないような遊びが、幼稚園の中では毎日のように繰り返されています。その一つ一つを、これはこんな意味があり子どもはこんなふうに成長しました、などと大層な教育論を展開するつもりは毛頭ありません。

子ども達が、毎日すごーく楽しいと心から思えるような生活ができれば、それだけで幼稚園としての意味があるのではないかと、「椎の実やさん」に精出して生き生

き輝いたNちゃんの顔を見ながら、私はつくづく考えたのでした。

〈とかげのしっぽ〉

毎年必ず一人や二人はいる「虫大好き」の男の子。そんな年長の男の子の間で、「とかげ」を捕まえるのがはやっていました。

するするっと身をかわして逃げる「とかげ」を素手で実に見事に捕まえるのです。

「かわいいよ！」とU男君は、「とかげ」の頭を、優しく撫でています。

「せんせいもさわってごらんよ」と何度となく勧められましたが、青虫やみみずは触れても「とかげ」だけは苦手の私です。

水の中を泳がせてみたり、桑の実をくわえさせてみたり、「とかげ」はまさに生きたおもちゃです。

ある時は、さっと逃げる「とかげ」を素早く押さえ込んだのですが、しっぽのところで切れてしまいました。

「スゲーヨ、ちがでてるよ」

本当は、無傷で捕まえたいのですが、残念ながら胴体だけになってしまった「とかげ」としっぽを手にして、それはもう得意げに小さい池組さんに獲物を見せて回ります。

捕まえられた「とかげ」は、餌と共に、放課後の男の子の家々を順番に回ったりもしました。

こんなに捕まえても、次から次へと新しい「とかげ」達は、懲りずに幼稚園の庭に出没するのです。

もう何匹の「とかげ」達が家に持ち帰られたのでしょうか、果たして「とかげ」達は生きているのでしょうか？

そんな矢先、朝日新聞の「ひととき」の欄に「母子してとかげを飼っています」と言う記事が載っていました。生きた餌しか食べないので、母子で一生懸命ハエを捕まえて食べさせているとか。そのお母さんも一年前は「とかげ」などは気味悪くて触れなかったけれど、二年目には子どもと共に夢中になっているというものでし

た。

このお母さんのようには、私にはできないとは思いますが、一目「とかげ」を見ただけで、「可哀想だから、おうちに返してあげましょうね」と捨ててしまいたくはないと思います。

おもちゃのようにいじくり回して結局は死なせてしまったとしても、そこから生あるものは必ず死ぬのだということを知り、その中でこそ生き物への愛情を実感として学んでいくのではないかと思うのです。

毎日子どもと生活していて、子どもっておもしろいことを考え出すんだなと気付くことがあります。何でもない場面―ともすると見逃してしまいそうで単純で他愛のない遊びの中で、夢中になって何かになり切って遊ぶ子どもがいます。

このようなひと時は、本当に楽しく幸せな時であり、幼稚園時代だからこそ味わうことができるものでしょう。

にもかかわらず、私は時として、この子はどうしていつも一人でいるのかしら、この子はもっとお友達に優しい口調で話せばいいのに、この子はいつもテレビの話ばかり、などと子ども達の困った所ばかり目について、どうしたらこの子は変わるのかしら、どうしたらこんなことが身に付くのかしら、とだけ考えてしまいます。

そんな時私は、子どもと同じ目線で同じように遊んでみます。すると、へー、子どもってこんなこと考えて遊んでいたんだと、子どもの心にほんの一瞬ですが触れることができます。

これからもゆったりした心で、担任とは違った目で子どもの心を見つめていきたいと思っている毎日です。

（埼玉県立浦和女子高校附属幼稚園）